

無記

「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ、とかくにこの世は住みにくい」(夏目漱石、草枕)。漱石が指摘した通り、人の世に住んでなかなか思い通りにはいきません。その感じ方は、人によってまちまちでありましょう。皆様は良い世の中だと思いませんか、それとも今ひとつでしうか。最近口を開けば、政治は金にまつわる汚い話、子供は道徳精神がなっていない、凶悪犯罪は多く、我々もいつ被害者になるかわからない、北朝鮮からはミサイルが飛んでくる等、とにかく世の中は暗い話題が多いようです。日本全体が暗さに覆われているような印象もありますね。しかし世の中が良い悪いとか、明るい暗いとか言うのは、自分の見方、感じ方であって他人は違うのかもしれないと、感じ方はあくまで「自分」であって「他人」は違うのかもしれないと。仏教に無記という言葉があります。お釈迦様は、答えるに値しない質問を無記といたしました。お弟子が無記の質問をされますと、沈黙したと言われます。私達は無記に振り回されていないでしうか。一枚の布きれがあつたとしましう。同じ布きれから美しい着物が出来たり、雑巾などになります。本来布は布でしかないので、着物は「美しく」「雑巾は「汚い」と思つてしまひます。元の布は布であつても美しくも汚いものでないのですが、「私の勝手な思いが」区別してしまひます。布はきれいか汚いかは私の思ひであつて、本来は無記と申すべきでしう。世の中の善悪とか、明暗とか、美醜とかいうのも本来無記ではないでしうか。ところが「私」は自分勝手な符号やらレッテルやら、色眼鏡をかけて見てしまひます。そうして自分の感じ方を他人も同じように感じていふと思ひ込んでいふようです。「ウマが合う」といふ言葉がありますが、この感じ方に同調していく仲間でありまふ。ところがこの考え方は自分の思いと異なる人を「変わり者」「おかしな人」と、排除してしまひようです。「あいつはおかしい」とか言い、多数の論理がすべてに優先してしまひのが、民主主義なのかもしれないと。そのような考え方が逆に「仲間はずれにされたくない」、「変わり者と思われたくない」と、合わせてしまひ「生き方を私達はしていふようです。「本当の自分を生きていふか」と、問われまふとあやしくなつてしまひます。今盛んに選挙が近い、内閣支持率が言われまふが、ささいな事で支持率が一方的に流れる恐ろしさを感じまふ。時代の雰囲気にながされやすいのが、今の「私」のようです。テレビ番組も視聴率の奪い合ひです。視聴率が高いのが良い番組なのでしうか。行列をなす食べ物屋さんが良い店なのでしうか。みんなが並ぶ、みんながやつていふから、良いことなのでしうか。自分はどこに行つてしまつたのでしうか。このような世間の常識のよなものに縛られていふ「私」なす。しかしそれは世間の常識が私を縛つていふのではなく、私の思いが私を縛つていふのです。「自縄自縛」そのものです。そのようなことが差別、偏見を生み出す元になつていふのでしうか。仏教の見方は「無記」とか「不増不減」(増えもせず減りもせず)であり「如实知見」(ありのまま)であります。ウワサ、評判、口コミといふのも私達の判断材料かもしれまふが、今「自分の見方」「自分の感性」で学ぶ大切さを思ひます。「私を生きていふ」とはそのよな事なので。悔いなし自分の人生を生きて抜きたいものです。